

第二言語の語彙習得に関する研究 プロトタイプとの関連から

著者	金 祉?
号	27
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第491号
URL	http://hdl.handle.net/10097/63782

要 旨

本論文は韓国人日本語学習者の日本語の語の意味の習得過程を考察したものである。韓国人日本語学習者の思う日本語の動詞の意味の典型度を、L1 の影響や L2 の習熟度の影響を踏まえて考察し、意味の典型度と意味の受容度との関係を検討した。また、典型度の形成要因を検討した。

論文は 9 章からなる。1 章～3 章で先行研究や予備調査の結果を踏まえ仮説を示し、4 章～5 章で調査語の検討、調査語の特徴の考察を行った。6 章～7 章で調査語の意味の典型度と受容度を日韓両母語話者や韓国人日本語学習者を対象に調べた。その結果をもとに 8 章で仮説の検討を行い、9 章でまとめている。

1 章「序論」で L2 としての日本語の語彙習得についての先行研究を概観し、L2 の概念形成に L1 の概念知識が選択的に関わっており、その選択的関与に言語話者が L1 の意味に感じる典型度があることを示した。

2 章「理論的背景」では、2 つの方面で理論的探索を行った。1 つはプロトタイプ（言語話者が最も典型的と思う意味）に関連した研究に絞って考察を行い、先行研究の成果や残った問題を整理した。もう 1 つは習得研究の知見の一般化を高めるために認知意味論的考え方を習得過程考察に応用することを提案し、関連した理論的議論を行った。

3 章「問題設定と仮説」では、学習者の L2 語に持つ、プロトタイプに関する知見が不足していることを指摘し、予備調査を行った結果を踏まえ、以下の 3 つの仮説を提示した。1) L1 のプロトタイプは、IL のプロトタイプの形成に関わる。2) 習熟度が高くなるにつれて、どの意味を典型的と感じるかについても変化が見られる。3) IL のプロトタイプと L2 のプロトタイプとの共通点や相違点を見ることで習得過程や習得順序の説明が可能な部分がある。これらの仮説はそうになる背景の考察も含むものである。背景の考察には、意味派生に動機付けを与えるとされる、意味の描く事象の身体経験としての強さ（以下身体性の高さ）、メタファーやメトニミーのような派生メカニズムを用い、使用頻度要因も合わせて検討する。

4 章「調査語の検討」では、身体性の高さとは多義性という 2 つの観点で韓国語の使役移動動詞とその日本語の対訳語を比較し、L1 には身体性の高い意味があるが、L2 にはないというずれが生じやすい意味領域を明らかにした。その考察結果をもとに、日韓で身体性に違いのある動詞、共に身体性を有する動詞、共に身体性を有しない動詞をそれぞれ 2 ペアずつ取り上げ調査語としている。

5 章「調査語の意味：その理論的検討」では、6 ペアの調査語の中で韓国語の方の意味の多義構造を基本義（身体性あり／なし）、メタファー、メトニミーの分類を用いて明らかにした。また、コーパス調査を行い、それぞれの意味の日韓における使用頻度を調べた。理論的にプロトタイプになるものを予測してみたところ、使用頻度の面では6 ペアの語は同様のプロトタイプが、多義構造の面では異なるプロトタイプが考えられた。身体性の違いによるものである。

6 章～8 章では調査語の意味の典型度と受容度を調べている。日韓の母語話者、韓国人日本語学習者（初級、中級、上級）を対象に行った。両母語話者には母語として、学習者には日本語としての判断を求めた。その調査結果をもとに仮説の検証を行い、概ね支持されたことを示した。

ⅡL のプロトタイプの形成要因については、L1 における身体性の影響が大きかった。1) 共に身体性を有する動詞は身体性の高い意味がプロトタイプで習熟度による違いが見られなかった。2) 身体性に違いのある動詞は L2 にその意味がない場合でも学習者はその意味をプロトタイプとして持っていた。3) 共に身体性を有しない動詞においては、L2 で相対的に身体性の高い意味が習得の初期段階のプロトタイプとなっていることが見られた。

ⅡL の意味構造の変遷については下位群では意味の身体性の影響が高く、上位群では意味の使用頻度の影響が高かった。ⅡL において典型度が高くなる意味は L1 おける身体性が高い意味、使用頻度が高い意味であった。メタファーが関わっている意味も典型度を高める要因ではあったが、使用頻度要因によるところが大きかった。メトニミーは典型度を下げていた。身体性のない動詞においては、基本義、メタファー、メトニミーが共に典型度を高めており、使用頻度要因は典型度を高める方向には働いていなかった。

ⅡL の受容度は必ずしも典型度によらないが、ⅡL の意味の受容度は意味の典型度の高さと概ね連動するものであった。

9 章では日本語教育への示唆点として学習者の意味知識に戦略的に働きかける必要性を挙げた。具体的には ⅡL の典型度が高まるメカニズムを利用できるようなインプットとアウトプットを行っていく必要がある。調査語や学習者の母語を変えてこの知見の広がりを検討することが今後の課題である。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	金 祉諱
論文審査担当者	(主査) 教授 才田 いずみ 教授 名嶋 義直 准教授 田中 重人 准教授 甲田 直美
論 文 名	第二言語の語彙習得に関する研究—プロトタイプとの関連から—
<p>本論文は、韓国人日本語学習者の多義動詞の意味習得に関する調査研究を通して、第二言語の語彙習得プロセスの一端を解明しようとするもので、韓日両母語話者と日本語学習者による語の意味の典型度判断と受容度判断の結果を、語の意味のもつ身体性の高さや意味派生メカニズム、語の出現頻度などとの関係から考察し、学習者プロトタイプ形成への影響要因を探っている。</p> <p>論文は9章から成る。1章と2章は先行研究を扱っている。1章では第二言語としての日本語の語彙習得研究について、2章ではプロトタイプの定義と、多義に関する認知意味論の考え方に基づいたメタファー、メトニミー、シネクドキーなどの多義派生メカニズムについて扱う。3章では、学習者の中間言語でのプロトタイプに関する知見が不足していることを指摘し、予備調査を実施した上で3つの仮説—1) 母語のプロトタイプは、中間言語のプロトタイプの形成に関わる、2) 習熟度が高くなるにつれて、どの意味を典型的と感じるかについても変化が見られる、3) 中間言語のプロトタイプと目標言語のプロトタイプとの共通点や相違点を見ることで習得過程や習得順序の説明が可能な部分がある—を提出する。4章と5章では調査語の検討を行う。4章では韓国語の使役移動動詞97語と日本語の対訳語を比較検討し、韓日で身体性の高さのずれが見られる意味領域を明らかにして6対の調査対象語を抽出する。5章ではその6対の語についてそれぞれの意味を確認し、韓国語の意味について認知意味論的考察を行うとともに、語のそれぞれの意味の使用頻度をコーパスを用いて調査する。6章と7章では意味の典型度と受容度の調査を、6章では韓日母語話者に、7章では韓国人日本語学習者に実施する。7章では学習者と母語話者の結果の比較も行う。8章では以上を踏まえて仮説を検証し、仮説が概ね支持されたと述べる。9章では全体をまとめ、日本語教育への応用として意味の身体性や類似性に注目させることや肯定証拠と否定証拠を与えることなどを提案している。</p> <p>本研究はプロトタイプと身体性を中心に、意味派生メカニズムも絡めて多義習得を論じ、意味の描く事象の身体経験としての強さ、すなわち身体性の高さが中間言語におけるプロトタイプ形成に大きく影響していることを示し、身体性の有無が見せる影響の違いも明らかにしている。しかし、論の運びはわかりやすいとはいえない。また、分析の際に、要因数や条件を絞る手段として補語の違いを捨象したり意味をまとめて扱ったりした箇所もあり、緻密な調査手続きとは一貫しない印象を免れない。一方で、6対の多義動詞について、日韓両母語話者と学習者がどの意味を心理的プロトタイプとして持っているかを明らかにした点は、この分野の不足部分に実証的な知見を加えた点で評価できる。瑕疵はあるものの、総合的には、本論文は第二言語習得研究の発展に寄与するものと言えよう。よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	